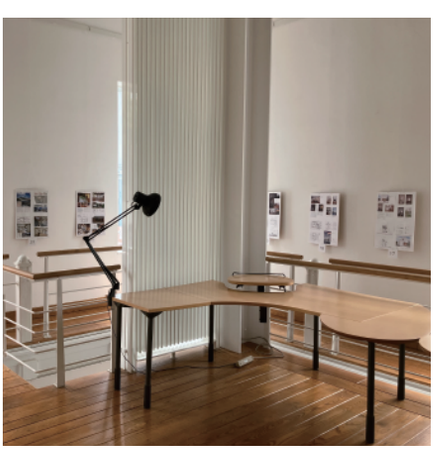
第 12 回　JIA 熊本 住宅賞











■ 目次

1. 審査員総評コメント

熊本大学大学院先端科学研究部 教授
審査員長　田中 智之 ---------- 1

JIA 九州支部長
（株）松山建築設計室 主宰
審査員　松山 将勝 ---------- 2

JIA 九州支部熊本地域会 前会長
（有）堀田総合設計 主宰
審査員　ほりたみのる

熊本日日新聞社編集局統合編集本部
審査員　魚住有佳 ---------- 3

2. 受賞作品

JIA住宅賞 江津ハウス
矢橋徹建築設計事務所（矢橋徹・上野拓美）---------- 4

JIA審査員賞 岱明の家
class archi 株式会社（新田崇博・樋口祐介）---------- 8

JIA審査員賞 築150年納屋の民家再生
すまい塾 古川設計室 有限会社（古川亮）---------- 12

JIA審査員賞 本山の自邸
阿部悠子設計アトリエ（阿部悠子）---------- 16

表彰式の様子 ---------- 20

■ 第 12 回 「JIA 熊本住宅賞」の審査を終えて

審査員長　田中 智之
熊本大学大学院先端科学研究部 教授

審査は応募 24 作の資料をじっくり読み込むところから始まった。現地審査がないことから、写真・図面・テキストによる限られた情報の中で、設計者の意図、工夫点などについて出来る限り理解したつもりである。ただ審査員からも「敷地の周辺状況がもっと分かれば」「実際どのように使われているか知りたい」といった声があったように、全体的に地域との関係や実際の生活の姿についての表現が充実されると良いと思う。

この書類審査において応募作の内容が十分に理解され、さらに本賞の趣旨として謳われている「地域と建築文化の向上に寄与すること」に応えている点があると判断された４作が入賞として選定された。

JIA 住宅賞を受賞した「江津ハウス」は１階をカフェにした２階建ての兼用住宅であり、当面は週末住居として徐々に暮らしを移していく住まいである点で一般的な専用住宅とは趣が異なる。それ故全体的には特異な空間構成を持つ「がらんどう」であるが、それは決して特殊解ではなく、むしろ多様性を前提とした新たな地域性と理解できる。さらに、このガランとした空間をつくり出す構造や構法の選択が的確であり、極めてレベルの高い作品であるとして一同評価。ただ個人的には、構造（特にあの大ブレース）とプランが綺麗に調整されているのが気になり、もう少し全体的に「野性」があっても良いのではないかと感じた。

審査委員賞は以下の３作。「本山の自邸」は一見、周囲に閉じた切妻のシンプルモダン住宅であるが、２世帯住宅とアトリエという要件を廊下のないプランで解いた構成力、閉じつつも内部からは開いた生活のできる空間力、高いエネルギー性能を実現した設計力により新たな環境共生住宅のあり方を予感させる佳作。これをもう少し地域に開くことが可能かを考えると良いと思う。

「岱明の家」は 300 坪を超える広大な敷地において、塀をつくらない構え方、接道付近に東屋を配置する開き方という意外な方策により、独自性のある郊外型住宅のあり方を示している点が評価された。建築自体の空間構成やディテールなど実空間の質も高そうだ。

敷地の大きな余白には芝生とマウンドが設けられ、木々の成長による周囲の風景との調和が期待されているが、樹種の選択やランドスケープの工夫などに地域性が考慮されると更に良いのではないか。

「築 150 年の納屋の民家再生」は、八代に住む高齢の夫婦に母家と納屋の「交代」を提案したという衝撃作。

80 坪の母家は大きすぎることから、30 坪の納屋は丁度良く、母家に住みながら工事できるのも良い。このようなコンサルティングも地域の建築家ならではの職能であり、重要なことである。

強いて言えば伝統的な軸組などの「残すもの」と新たなインテリア要素である「加えるもの」の構成にデザインコードが設けられると良いと感じた。

以上が入賞作を中心とした講評であるが、全体的にはどの作品にも地域性や建築文化の向上に寄与する工夫が感じられ、第 12 回 JIA 熊本住宅賞は充実した審査となった。

新型コロナにより８年ぶりの開催ということで意欲作が多く集まったという見方もあるが、この充実度が毎回続いていくことを期待したい。

審査員　松山 将勝

JIA 九州支部長
（株）松山建築設計室 主宰

今回は現地審査がなく、提出された応募資料で受賞作品を決めるという審査プロセスにいささか不安を抱いて審査に臨んだ。

それ故に審査員には入念に資料を読み込み、洞察力と解読力が求められる審査会となった。

応募数２４作品の中でも一次審査を通過した８作品は、紙面からでも非常に高度な作品のレベルである事が確信できた。

最終選考では、ひとつひとつの作品を審査員全員がそれぞれの視点で議論を展開し、その内容は社会性や革新性にまで及んだ。受賞された作品の講評は他の審査員に託すとして、別の視点で今回の審査会で感じた事を総評としたい。

最優秀賞である JIA 熊本住宅賞を受賞した「江津ハウス」は応募作品の中でも極めて問題作であると同時に、建築がもたらす革新性においては他の追従を許さなかった。下階にカフェの機能を持ち、上階はがらんどうのまま開放されているこの建築は果たして何者なのか。

その正体を探るべく審査員の論点が多様に広がっていき、その議論は建築賞の評価軸にまで及んだ。そんな議論を巻き起こす建築作品は少ない。

住宅賞という視点に立てば、住み手側の暮らしが担保されているか否かは大きな評価軸であろう。

しかしこの建築にはその担保が見られない。さらに言えば、住宅であればなおさら明確な機能が求められるものだが、その機能さえも曖昧である。

それでもこの建築には未来がある。住居としての用途を終えても、さまざまな用途に変換できる寛容さがあり、持ち主が変わったとしても生き続ける強さを備えている。

つまり、持続可能なプログラムが巧みに描かれているのだ。しかも最小限の操作で。

そんな未来を暗示させてくれる建築が、住宅賞の評価軸としてあっても良いのではないか。そんな思考に導かれた審査会であった。

審査員が変われば評価軸も変わるのが建築賞だが、次回も住宅賞の評価を揺るがすような問題作が現れる事を期待したい。

審査員　ほりたみのる

JIA 九州支部熊本地域会 前会長
（有）堀田総合設計 主宰

レベルの高い作品が多い中、プレゼンテーションに表現された建築家による提案の切り口は多岐にわたりました。自分が予め準備しておいた判断基準や評価軸を再構築する必要があり、作品をひとつひとつ読み解きながら徐々に思考を整えていきました。

全ての作品を一巡した時点で、次の視点で評価することとしました。

1. 作家性・デザイン性
2. 社会的コンセプト・問題の提起
3. 生産システム・歴史的建築が保有する価値の尊重
4. クライアントの満足度追求・生活空間の創出
5. 構造的な提案

もちろん、これらはともに独立し、相反しているわけではなく、それぞれの作品に共存する要素です。写真や図面、丁寧に書かれたテキストなどを、限られた時間でできる限り丁寧に読み解くことで、建築家が最も重要と考えた要素や設計意図、コンテキストを抽出し、表現された作品のクオリティーを評価いたしました。

１次審査では建築家が何百時間、あるいはそれ以上の時間をかけて構想し、設計し、監理して作り上げた建築を極めて短い時間で判断します。

最初は口当たりのいい（プレゼンテーションの見栄えがいい、あるいは異質な）作品に注目しますが、作品を理解していくに従い、本質が理解できるようになります。今回は審査途中の議論により、他の審査員の方の意見も聞く事ができました。このことは理解のスピードを加速してくれたように思われます。

住宅賞を受賞した「江津ハウス」は、１次審査で推した作品のなかの一つでした。最初は構造的な視点で推しましたが、当初気が付かなかった建築家の設計意図やアイデアについて、先に述べた議論の中で気付かされた事もありました。

このようなことも、今回審査員を務めさせていただき、得られた面白さのひとつであったと思います。

審査員　魚住有佳

熊本日日新聞社編集局統合編集本部

応募作 24 点は、住宅密集地や傾斜地などさまざまな立地条件の下、施主の家族構成や要望に沿いながらも、各設計者の視点から「より良く住まう」ことに迫った力作ぞろいだった。

グランプリの「江津ハウス」は、正方のフロアを対角線に分節し、窓や壁面に大きな筋交いを入れた設計で、シンプルだが大胆で斬新な印象を受けた。今後の生活で間取りが変わりうることも含め、住み手によって建物が変容しながら存在し続ける可能性を描ける点で、他作品とは一線を画している。

「岱明の家」は、広々とした敷地に方形屋根のあずま屋と住居がリズミカルに配置されていた。あずま屋が道路に近い点や、将来的には樹木が増えるという想定からは、一家族の暮らしにとどまらない地域に開かれた「憩いの場」を思わせる。家族の営みが地域に溶け込み調和しながら、新たな景観が形づくられていくイメージが膨らんだ。

「築 150 年納屋の民家再生」は、高齢夫婦の将来を見据え母屋から納屋への住み替えを提案した温かみのある改修建築。梁や土壁など古材を再利用することで、施主と建物の記憶を継承しつつ、ＣＯ2 排出量削減という環境問題にも対応した。高齢社会を迎え、ＳＤＧｓへの取り組みも求められる今の日本において、注目されるべき作品だ。

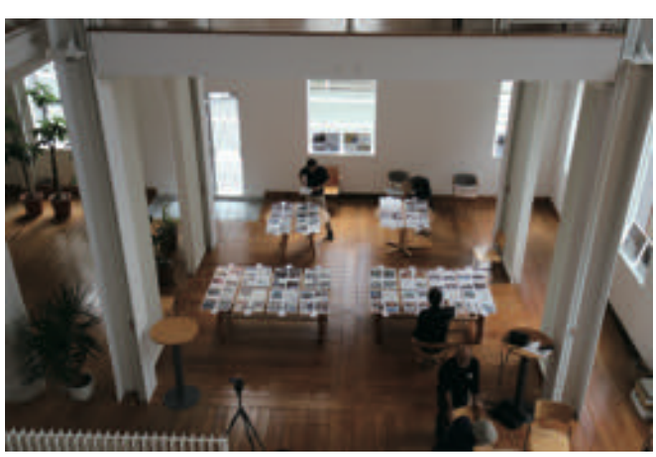
「本山の自邸」は中庭を中心に家族が回遊できる動線で、プライベートを保ちつつ互いの気配が感じられる提案。限られたスペースや十分とは言えない周辺環境でも、窓を通して外の景色や光の移ろいをうまく取り込み、家族とのゆるやかなつながりを生み出す仕掛けが随所にみられ細やかな心配りが伝わった。

このほか、〝半透明〟をコンセプトにした「健軍の住宅」や、床下空間で生態系を育む「床と大地の余地」など、発想や着眼点が面白い作品もあった。ただ、審査では個人的に「家族と長く住みたいと思えるか」という観点を重視したため、上記の入賞４作品には及ばなかった。









江津ハウス JIA住宅賞　矢橋徹建築設計事務所（矢橋徹・上野拓美）



敷地は湧水公園の湖岸道路沿いにミニ開発された住宅地の一角にある。敷地は湖岸に沿って段上がりの地形になっているため、敷地からは隣地の庭や住宅の屋根の連なりが見渡せ、遠くにある山々なども望める。様々な距離感にある景色や方位ごとの広がりが散在している環境だ。

計画は1階をカフェとした2階建ての兼用住宅である。施主は、この住宅を当面ウィークエンドハウスとして使いながら、徐々に暮らしを移していくことを計画していたため、生活を規定せず、変化に適応できる空間が求められた。日常を守る家、もう一つは開放的なヴィラ、施主はこの二つの住宅を行き来しながら生活を拡張する。

敷地に正方形プランを置き、上階の床を対角線で分節した。床をスキップさせて地面とのパラメータを増やし、螺旋状の縦移動でつなげることで、場所ごとに様々なパースペクティブを持った３層構成とした。各フロアは最小限の機能に抑え、家具や植物で自由に場が作れる「がらんどうの空間」である。

１階の店舗エリアと上階の住居エリアは、対角線上に配置した耐力壁で断片的に仕切るだけにとどめ、２層分の開放的な空間と低い親密な空間、異なるスケールの空間が交互に連続する立体的なワンルームである。

さらに、外部の豊かな環境を関係付けするため、耐震要素の軸組に、耐風・断熱・開口のための外皮が巻きついた二重架構とし、開口の自由度を上げている。

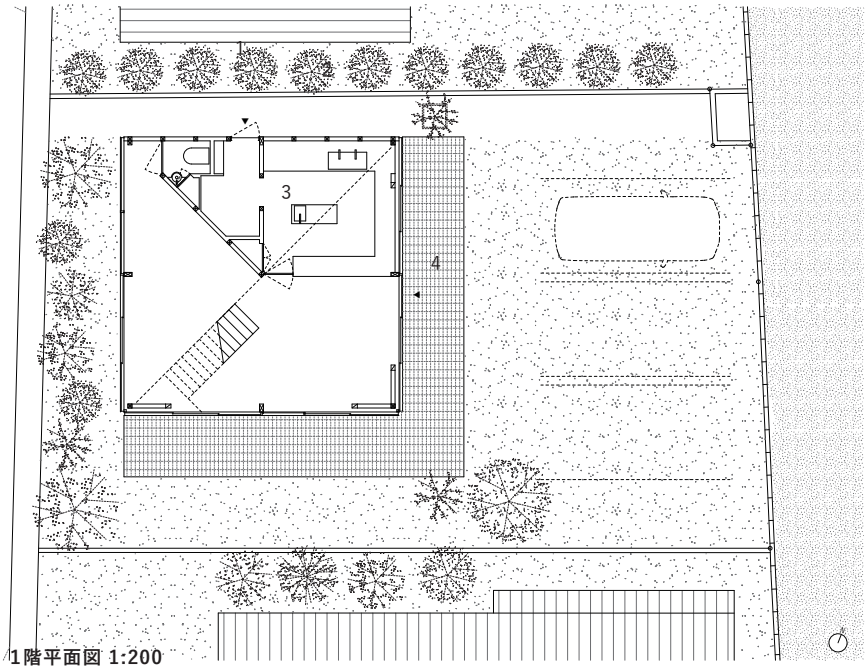
あらゆる方向に設けた窓は、内部に間仕切がないこともあって、身体の位置や移動に合わせて隣り合うフロアの窓越しから空や緑が見えたり、突然視線が抜けたり、どこにいても外を感じられる開放感を生み、場所の豊かさそのものに住んでいるようなおおらかさを感じさせる。

この住宅は、極端に言えば床、外皮、開口を道具立てして組み立てられているだけである。しかし、その他者的な形象は環境を内なるものとして繋ぎとめ、生活が環境の一部になるための治具となる。

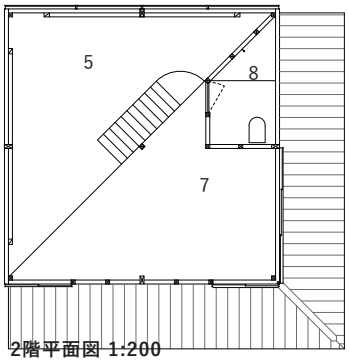




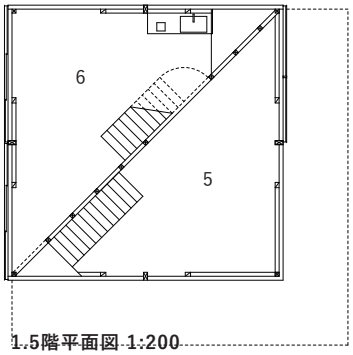




1階平面図 1:200



2階平面図 1:200



1.5階平面図 1:200

1:玄関　2:店舗厨房　3:店舗客席　4:軒下広場　5:吹抜け　6:室1(ダイニング・キッチン)　7:室2(リビング・寝室)　8:ユーティリティ



境界をぼかす二層構造

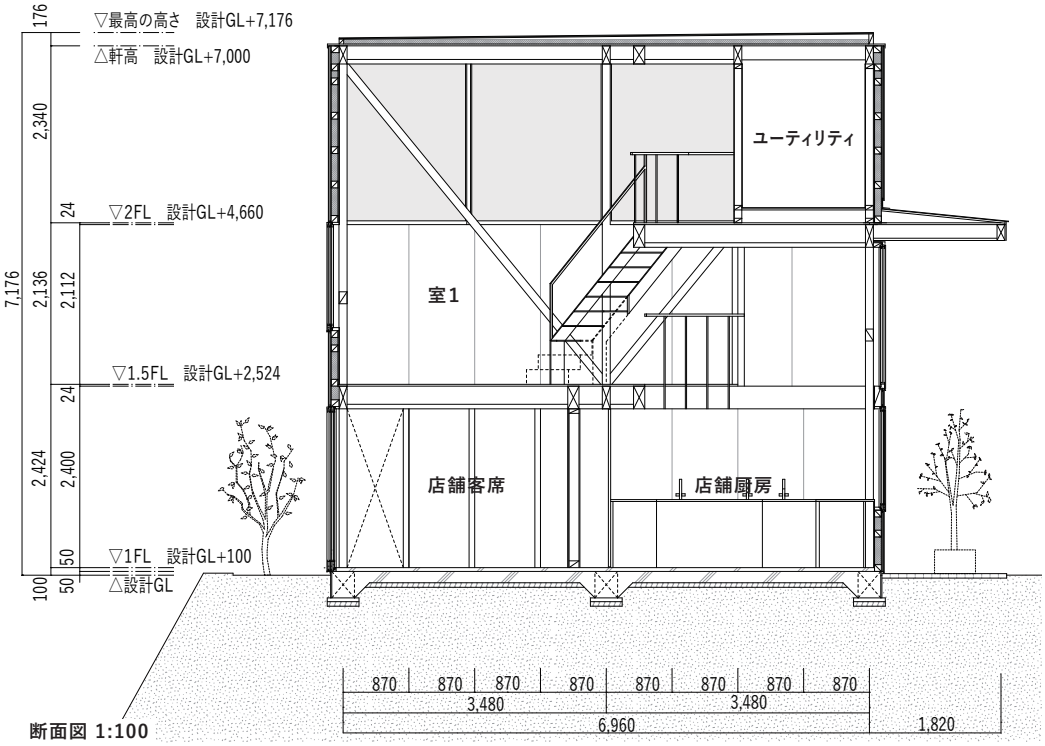
建物に入ると外壁面から構造躯体が分離されているため明確な軸組構成が認識できるとともに、2層にまたぐ筋交いや柱が木造でありながら鉄骨造のような軽快さを印象付ける。筋交いは座屈長さが問題になるが、外壁内部に仕込まれた耐風梁が座屈補剛材としても機能している。また柱も風圧方向に210せいの断面を使用しているが外壁内部で耐風梁と一体としているため室内にそのボリュームを感じさせない。接合部は柱ホゾパイプに筋交いボルトをドリフトピン代わりに兼用することで無駄のない応力の伝達としつつ、意匠的にも外部に露出しない接合方法となっている。











断面図 1:100

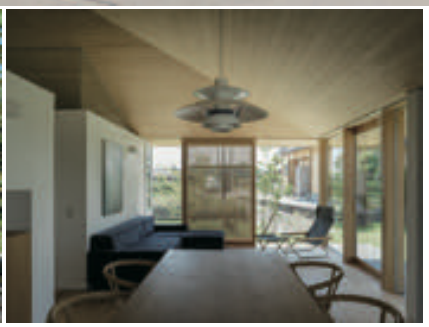
建物概要

[構造]
主体構造・構法　木造
基礎　べた基礎
[規模]
地上 2 階
　軒高　7,000mm　最高高さ　7,176mm
敷地面積　245.81 ㎡
建築面積　62.29 ㎡
（建蔽率　25.34％　許容　30％）
延床面積　109.00 ㎡
（容積率　44.34％　許容　80％）
　1 階　51.62 ㎡　2 階　57.38 ㎡
[工程]
　設計期間　2021 年 10 月～ 2022 年 10 月
　工事期間　2022 年 11 月～ 2023 年 3 月
[外部仕上げ]
屋根／ FRP 防水
　　ガルバリウム鋼板　タテハゼ葺き
外壁／ガルバリウム鋼板　小波
開口部／アルミサッシ（YKKAP）
外構／透水レンガ TS-R（水野製陶園）
　　砂利敷き
[主な内部仕上げ]
床／モルタル金ゴテ押え　保護塗料
壁／モイス NT
　　ラワン合板　浸透性保護材
　　ケイカル板　ウレタンクリア
天井／構造現し　素地仕上げ
　　モイス N T

岱明の家　JIA審査員賞　class archi 株式会社 (新田崇博・樋口祐介)









計画地は有明海と小岱山の中間に位置する。有明海から小岱山に向かって緩やかに登る地形を有し、風景は水田から畑へと変化していく。敷地は広く、自然環境豊かでのどかな風景の中にぽつりぽつりと建物が点在する町の中にある。

クライアントは若い夫婦と二人の子供の四人家族である。生まれ育った土地に根付き、普遍的な美しさを持つ建築を望んでいた。

この建築は広い敷地の上にふたつの大きさの異なる方形屋根をふわりと架けることで形作られている。

大小ふたつの屋根にはそれぞれ「住まい」と「あずま屋」の機能を持たせ、それらを土地の地形をトレースするように手前から奥に向かって緩やかに登っていくアプローチで結ぶ計画とした。敷地に対し大きく余白を持たせることで、敷地境界線という概念は滲んでゆき、少しずつ増えていくであろう樹々との調和によっていつしか周囲の風景の一部となるような建ち方を選択した。

内部空間は屋根形状をそのまま転写した方形の勾配天井が、簡素にまとめられた生活の場をふわりと覆う構成としている。建物の四隅を視覚的に開放し内部から軒先まで天井材を連続させることで、内部と外部の境界は滲んでゆき土地と生活の場との関係性を断続的なものにしている。

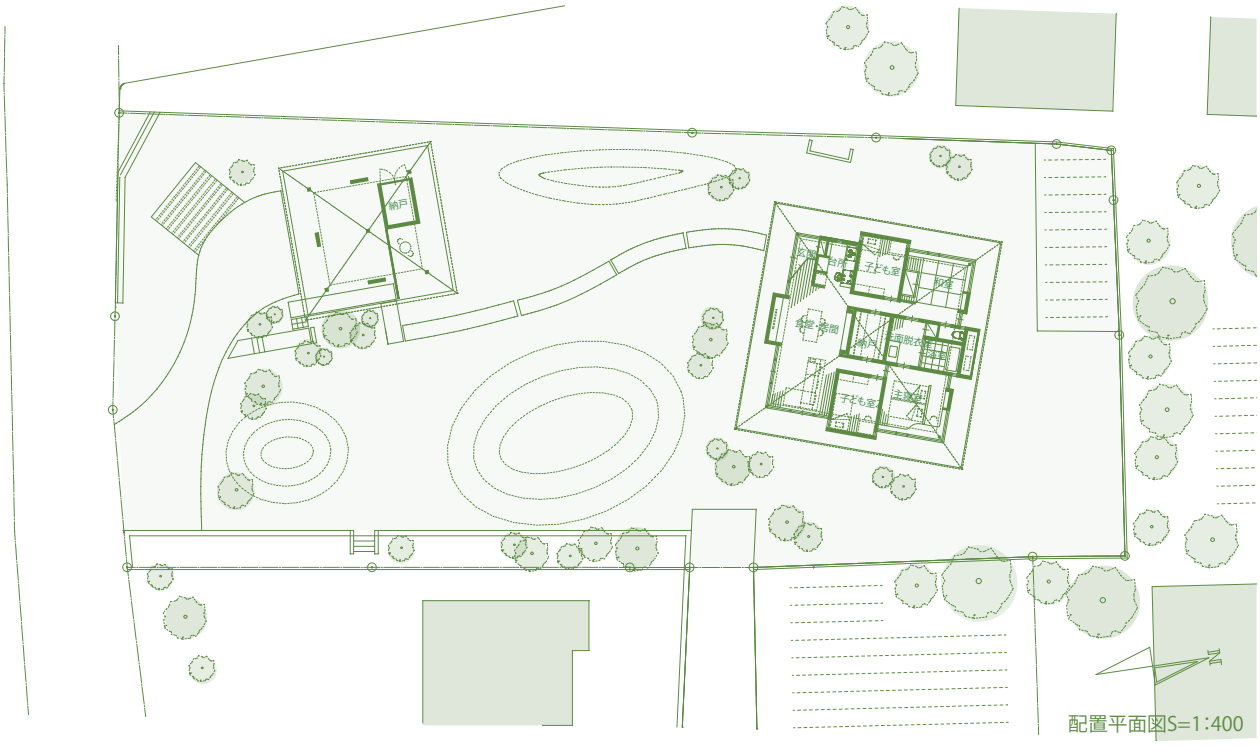
古来より人は屋根の下には居場所が生まれ、内と外との関係性を持ちながら生活を営んできた。

「住居」と「あずま屋」。ふたつの屋根の下に居場所が生まれ、それぞれが暮らし方と呼応し、その周りには様々なアフォーダンスが誘発される。 これから紡がれゆく住まい手の暮らしの風景が時を経るごとに土地に根付き、建築と暮らしの灯がのどかな町の風景の一部に成ることを願う。









配置平面図S=1:400













南北断面図











外部仕上げ

屋根	ガルバリウム鋼板横葺き
外壁	ジョリパット吹付け（モエン大壁工法下地） 杉板t15 竪張り押え縁 キシラデコール塗
軒天	杉板t12（上小節）本実張り
犬走り	豆砂利洗出し仕上げ

内部仕上げ

床	杉無垢板t30蜜蝋ワックス塗り
内壁	漆喰塗り（一部ビニルクロス貼り）
天井	杉板t12（上小節）本実張り
玄関床	豆砂利洗出し仕上げ

規模

構造	木造
階数	地上1階建て
敷地面積	1，017.96㎡
建築面積	住居　111.89㎡　あずま屋　33.87㎡
延床面積	住居　127.55㎡　あずま屋　46.51㎡

竣工	2021年7月

築150年納屋の民家再生　JIA審査員賞　すまい塾 古川設計室 有限会社 (古川亮)









敷地は熊本県八代市。高齢なご夫婦のための改修建築である。80坪の母屋に住んでおられるが、大きすぎて、床も高く、冬は寒い。この建物を快適にする再生を検討したが、かなりのコスト高になると予想した。

母屋の隣に納屋があった。中二階建てではあるが、1階の床面積は30坪と小さく、仕口・継手もしっかりとしていた。

こちらの納屋を住宅に民家再生し、母屋を物置として活用することを提案した。築150 年であるが、屋根替えは1回行われていて、壁の漆喰も部分的に補修されていた。日本の大工技能は時代を越えて共通しているので、現代でも修繕は可能である。また修繕計画において、真壁構造は内部解体せずとも構造体の劣化具合を大まかに把握することができるため予算組を建てやすい。開けてびっくり追加工事で施主ともめることも少ない。

土壁などの無機物には耐用年数はない。壊れている部分だけを直せばよい。壊した土は藁と水を加えて練り直せば新品と同じである。リサイクルではなくリユースである。

居住空間を25坪にして、半屋外の味噌部屋を付属させ、中二階小屋裏の床に断熱材をいれた。内部は土壁漆喰の真壁とし、外部は土壁の外にウール断熱材をいれ、土壁の蓄熱効果の優位性が発揮できるようにした。中二階小屋裏と味噌部屋は温熱的には外部であり、暖房空間は狭い。

地球温暖化になり、CO2排出量削減と省エネが叫ばれている。暖房エネルギー消費量を減らすために建物の外皮性能をあげよというが、九州の７地域では暖房エネルギー消費量は総エネルギー消費量の10%程度なので、省エネの効果は小さい。

世界的には、LCA（ライフサイクルアスセメント）が強調されている。建物の生産時や焼却時におけるCO2排出量削減の方が九州では効果的だ。解体して新築するのではなく、古いものを修繕して使えば、CO2排出量は劇的に少ない。原発のCO2排出量削減に期待する分くらいは建設業界で担えるのではないだろうか。



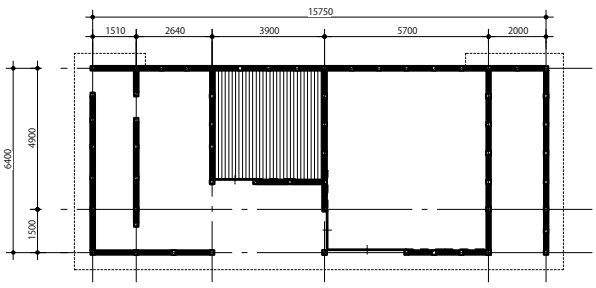
家族室　西側には地窓を設えた



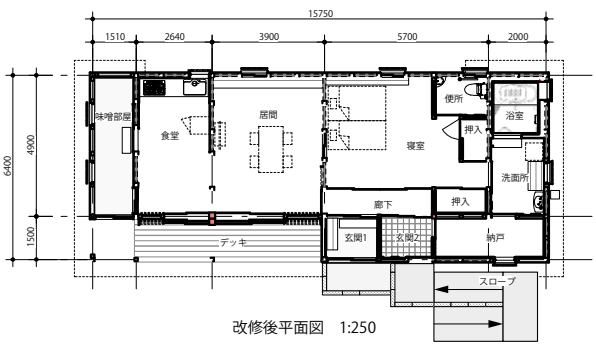




南西側から建物をのぞむ　左上：工事前　左下：工事中　右：完成後



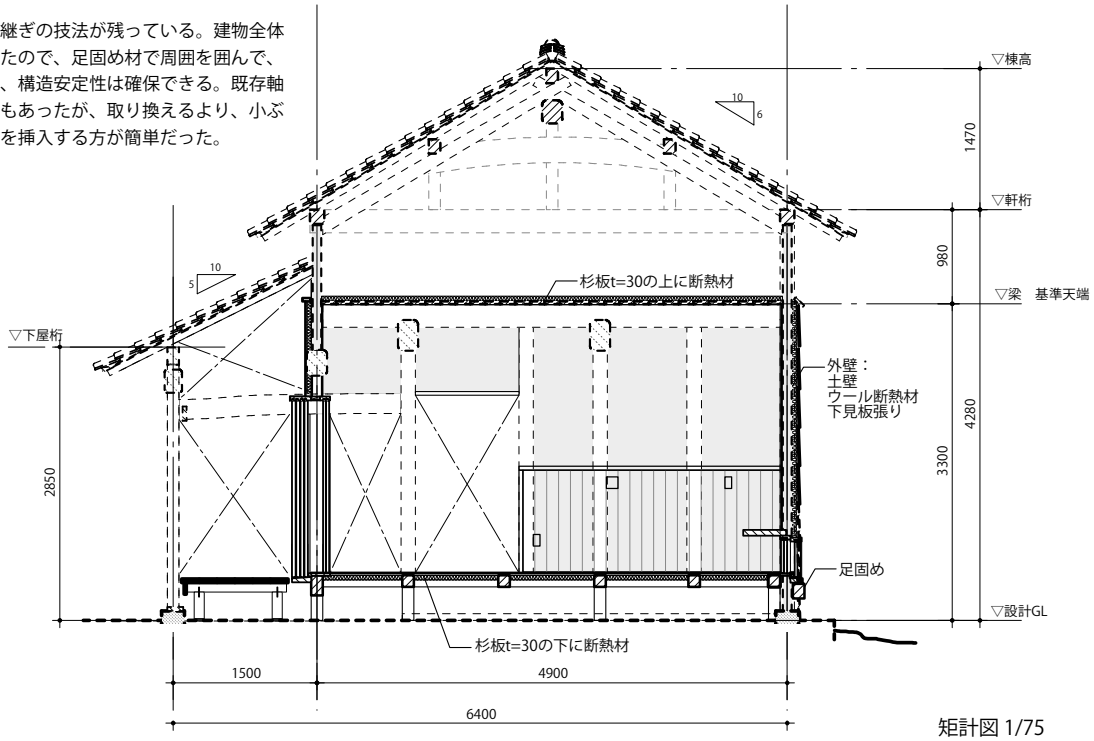
改修前平面図　1:250



改修後平面図　1:250

構造補強、断熱改修

柱下部の腐食部は根継ぎの技法が残っている。建物全体の足元が不安定だったので、足固め材で周囲を囲んで、布基礎状でなくとも、構造安定性は確保できる。既存軸組みが不安定な場所もあったが、取り換えるより、小ぶりの新しいフレームを挿入する方が簡単だった。



矩計図 1/75



補強柱は既存梁断面に合わせて現場加工



既存梁と新設柱を雇いほぞでつなぐ



新設土壁の小舞竹下地



南側は損傷が大きく、既存柱の内側にフレームを組み補強



解体工事あとの内部の様子



壊れた土壁の部分補修





居住空間のみを断熱。
床は発泡スチロール、
壁は羊毛ウール、
天井は現場で出た
かんなくずを袋につめて
断熱材として活用した



既存軸組を活かして、構造を補強した



車椅子用の玄関とスロープを設けた



南東から建物をのぞむ　風の出入り口となる大きな開口を設けた

■建物概要

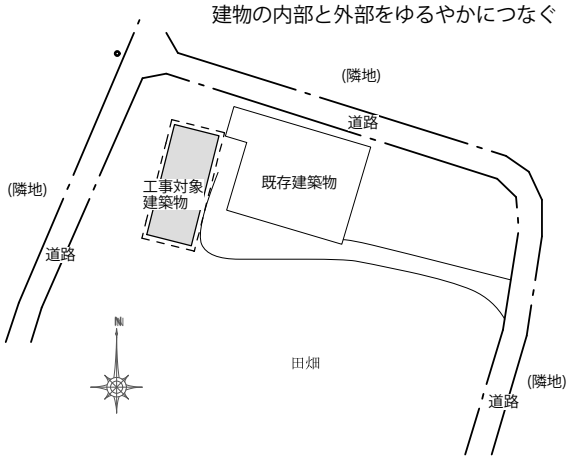
規模	：	構造　木造
		階数　１階
		建築面積　88.725㎡
		延床面積　88.725㎡
主な外部仕上げ	：	屋根　いぶし瓦葺き
		外壁　杉板下見板張り
		土壁漆喰仕上げ
主な内装仕上げ	：	床　杉縁甲板　30mm
		内壁　土壁漆喰仕上げ
		杉板　11mm
		天井　杉板　11mm
設計期間	：	2022年1月～2022年9月
施工期間	：	2022年10月～2023年6月



建物の内部と外部をゆるやかにつなぐ



家族室の猫間障子。



配置図　1:1000

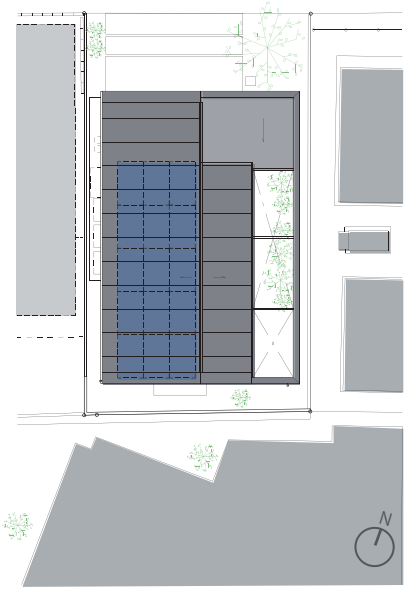
本山の自邸　JIA審査員賞　阿部悠子設計アトリエ（阿部悠子）



北側前面道路から外観をみる . 隣地東側は老人ホーム受水槽



配置図　1/2000



配置兼屋根伏図　1/200

設計者の自邸。約 40 坪の敷地に、祖母、父母、子ども 2 人、2 世帯 5 人の暮らす住宅と、設計者のアトリエを構える計画。

計画地周辺は昔ながらの住宅密集地。熊本地震以降、大きな空き家はマンションや病院などに建て替わり、小さな住宅と中規模建築が混在して建つようになった。計画敷地西側にも長年放置された空き家と南側には老人ホームが建っており、北側前面道路からみると日差しの乏しい陰鬱な環境だった。そこで将来を予測しづらい周辺環境と一旦距離をとるため、敷地いっぱいに閉じた家型のボリュームをつくり、その中に細長い中庭を設ける計画とした。

幅一間の小さな中庭は、住宅とアトリエのアプローチを兼用している。壁で囲まれ、プライバシーを確保した 1 階の中庭と繋がるように、内外を一体に感じられる玄関ラウンジを設けた。洗面・トイレの水廻りをコアとして、回遊できる動線の中に、庭を眺められるガラス張りの浴室、家事のできる階段下カウンター、祖母が寛げるラウンジなど、小さな居場所を埋め込みながら、限られた空間で 2 世帯が気づまりにならない工夫をしている。

一方 2 階レベルでは、中庭の外壁に開口部を設けることで、一旦閉ざした周辺環境と、中庭を介して繋がっている。フレーミングされた周辺環境をインテリアのように室内に取り込み、広がりのある、明るい空間をつくっている。また中庭に面して居間、寝室、こども室を設けることで、どこにいても外部との繋がりを感じることができ、更に、離れた部屋から中庭を介して家族の気配が伝わる。

中庭の外壁は、延焼ラインを切る防火壁として機能しており、中庭に面する諸室の開口部は防火設備の縛りなく、大開口の高断熱既製サッシの採用を可能にしている。

壁に囲われた中庭と、中庭を介して開かれた開口部によって、周辺環境が中庭の緑や光を介して、住宅の中へ重層的に繋がっていく。住宅密集地においても、光や風、緑を生活の中に取り入れ、雑多な周辺環境さえ美しく感じられる、のびやかな暮らしを叶えている。



アプローチからアトリエをみる



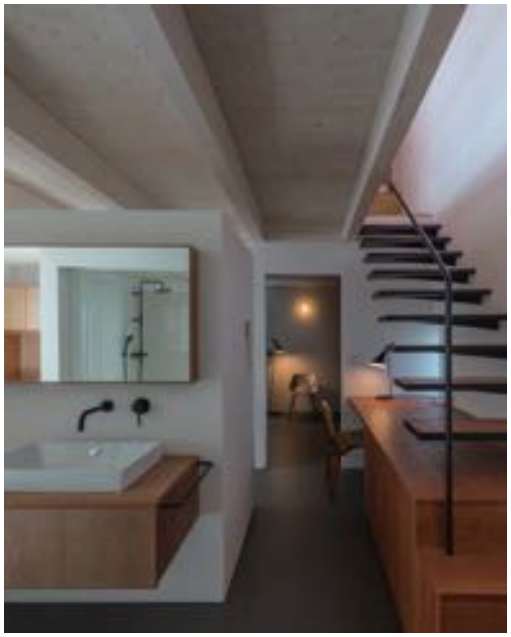
玄関ラウンジから中庭をみる



アトリエから中庭をみる



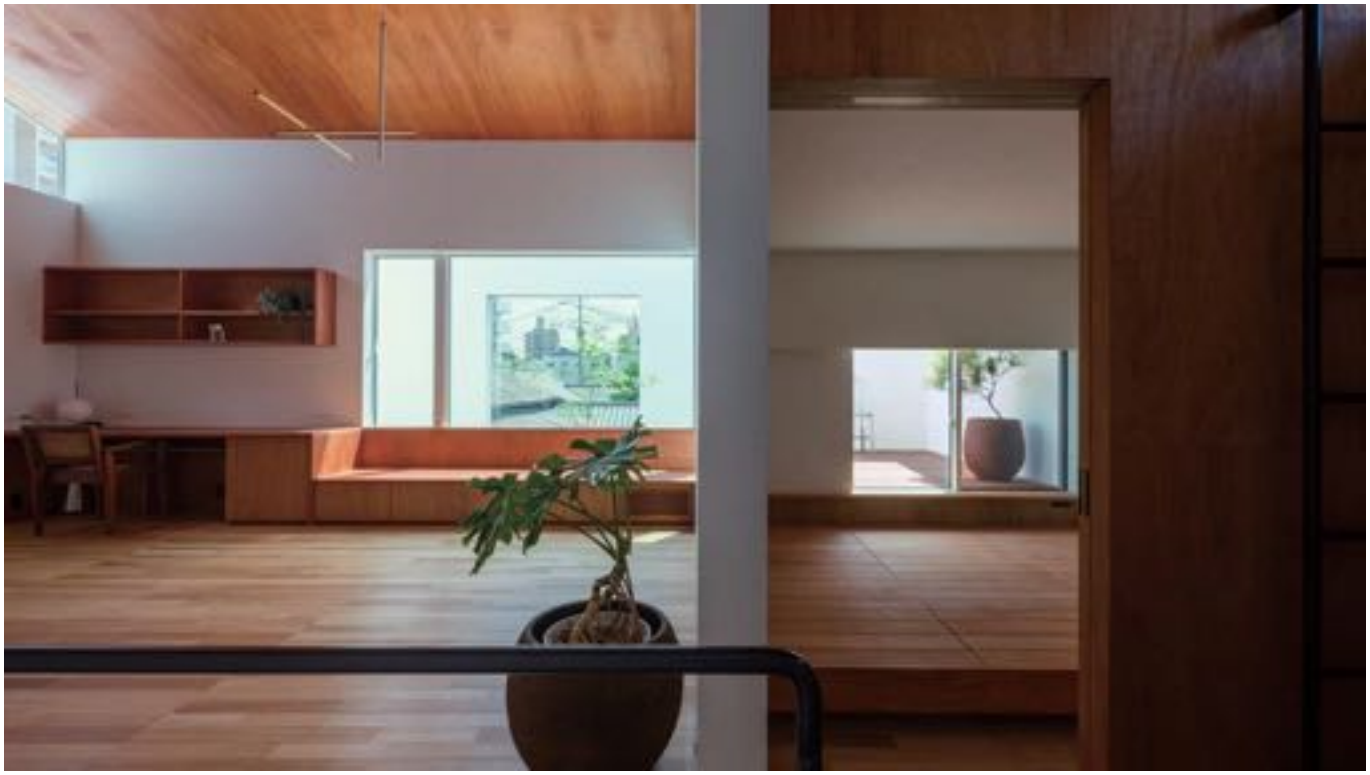
中庭と一体になる玄関ラウンジ



水廻りと階段をみる



水廻りのコアをみる



2 階リビング・寝室をみる・寝室のベッドフレームとテラスを段状に連続させ、外部との一体感を作り出している
フレーミングされた周辺環境をインテリアの一部として取り込むことで、暮らしの中で外部をより意識できる



勾配天井に沿ったハイサイドライトから北側の光を取り込む



防火設備のハイサイドライトと寝室上のロフトスペース



テラスを介してこども室をみる

建築概要

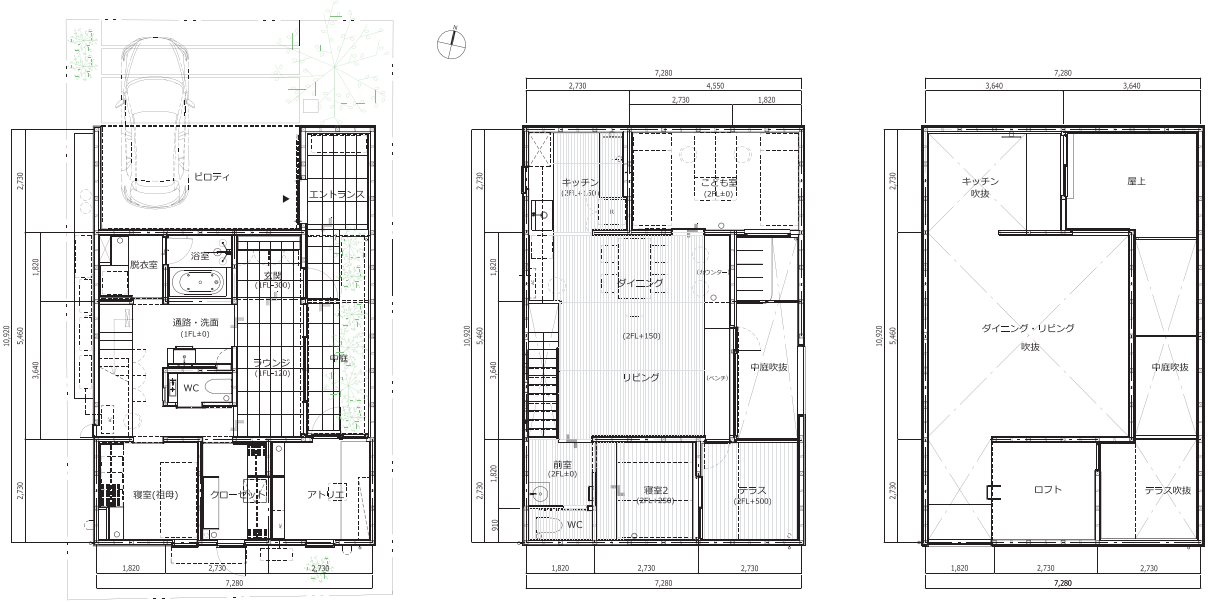
地域地区：近隣商業地域　準防火地域
道路幅員：北側 4m

構造：木造　　階数：2 階
敷地面積：131.78 ㎡　　建築面積：69.56 ㎡
延床面積：111.78 ㎡

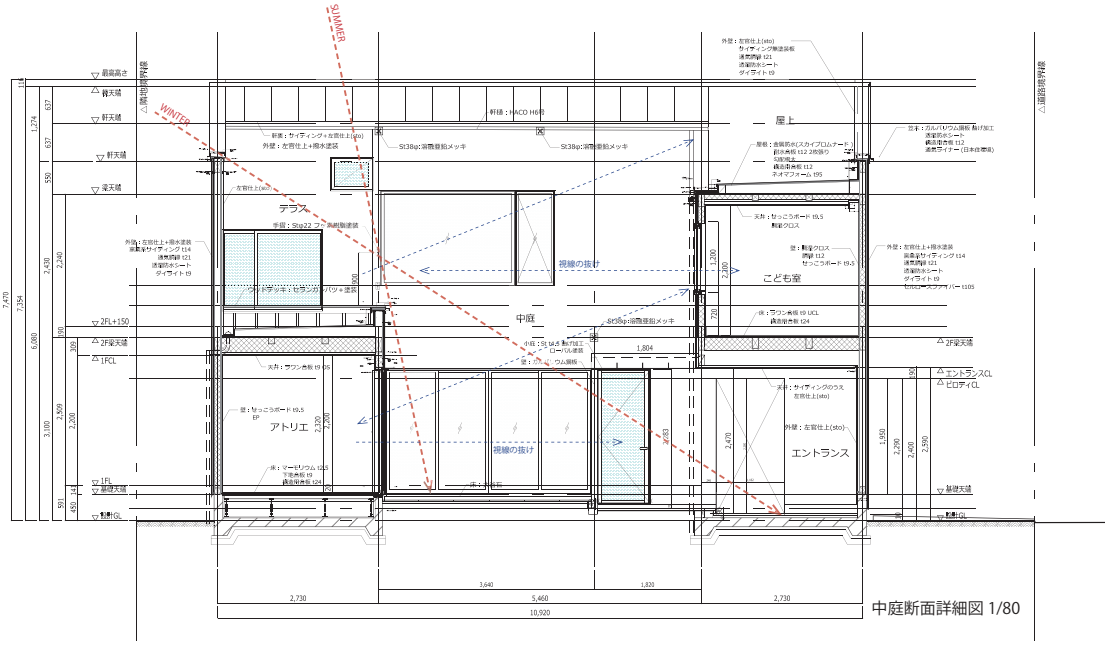
外部仕上
屋根：ガルバリウム鋼板縦葺き
外壁：エクセルジョイントのうえ撥水塗装

内部仕上
床：大谷石・リノリウム・無垢フローリング
内壁：調湿クロス・ラワン合板のうえ塗装
天井：調湿クロス・ラワン合板・化粧梁現しのうえ塗装

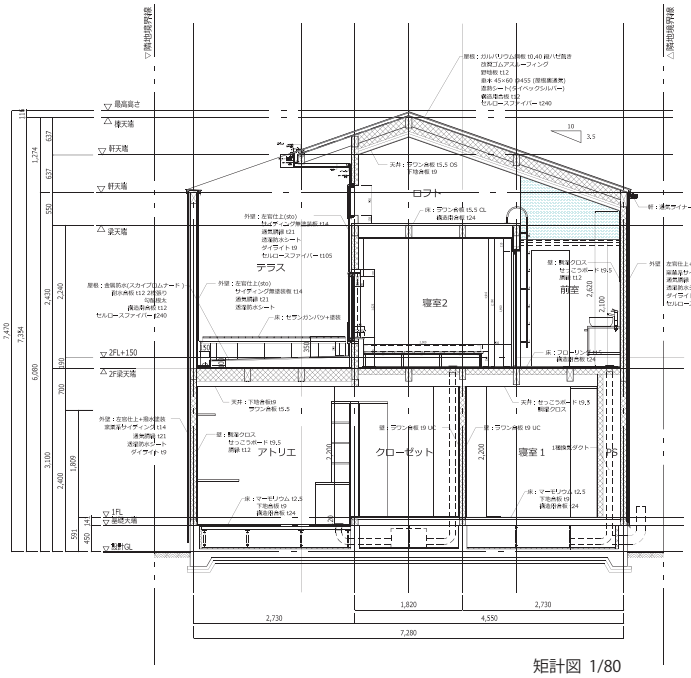
設計期間：2021 年 1 月～ 2021 年 9 月
施工期間：2022 年 1 月～ 2022 年 7 月



1F　2F　ロフト　平面図　1/100



中庭断面詳細図 1/80



矩計図 1/80

心地よさを実現するための温熱環境設計と
環境負荷を抑える製品・素材を選定している

エネルギー性能
UA 値　0.54 W/ ㎡ K

断熱仕様	
屋根断熱	セルロースファイバー吹込み　240mm
壁断熱	セルロースファイバー吹込み　100mm
基礎断熱	押出ポリスチレンフォーム　50mm
窓	アルミ樹脂複合サッシ（一部防火設備）
ガラス	Low-E 複層ガラス

設備仕様	
空調	壁掛けエアコン（1 台 / 階）
給湯	エコキュート＋太陽光発電
換気	1 種換気
空気循環	全熱交換機
太陽光発電	5.8kW



審査委員 松山 将勝



審査委員 ほりた みのる



審査委員 魚住 有佳



JIA 住宅賞 矢橋 徹



JIA 審査員賞 阿部 悠子



JIA 審査員賞 古川 保



JIA 審査員賞 新田 崇博・樋口 祐介



全体写真